

保育実習における学生の意識変化の考察  
実習評価と自己評価を対照として

A Study on the Changes of Consciousness by Practice Nursery School Teacher  
Through Evaluation from Students and Nursery School Teacher

廣瀬 久子  
Hisako HIROSE

千勝 真知子  
Machiko CHIKATSU

## I 初めに

つくば国際短期大学保育科に学ぶ学生は、保育士の資格を得るために保育実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを履修しなければならない。保育実習Ⅰは、1年次に保育所で行う実習と、保育所以外の様々な種別の児童福祉施設、あるいは社会福祉施設で2年次に行う実習であり必修科目となっている。保育実習Ⅱは2年次に保育所で行う実習であり選択科目である。保育実習Ⅲは、保育実習Ⅰの施設実習で実施した施設とは異なった種別での実習を行わなければならない。保育実習Ⅱと並び選択科目となっているが、保育実習Ⅲを履修する学生は、毎年全体の1～2%という少なさである。このような履修状況の中で、実習を通して学生の保育士としての学びがどのような成果をあげているか、学生の意識変化から考察する。ここでは、保育実習Ⅰの施設実習の分野と保育実習Ⅱの保育所実習の分野での、実習現場における実習評価と、学生自身による自己評価を対比することで論を進めたい。

## II 実習の方法と評価について

### 1 保育実習Ⅰ（施設実習）について

保育実習を控え事前指導に当たり、次のような項目を指導する。

- (1) 実習の意義・目的・内容を理解させる。
- (2) 実習の方法を理解させる。
- (3) 実習の心構えについて理解させる。
- (4) 実習課題を明確にさせる。
- (5) 実習記録の意義・方法を理解させる。
- (6) 保育計画、指導計画を理解させる。
- (7) 実習施設を理解させる。
- (8) 実習に関する事務手続きについて理解させる。

以上の内容を、実習終了後の事後指導を加えるが、半期15コマの保育実習指導の授業で学び、学生はそれぞれの実習施設に向う。施設実習に対し、授業で机上の学びは得たものの、施設という未知の世界に不安と心細さが先にたった心境で現場に臨んでいるのが実情である。

実習に入り成果をあげるために、施設実習の目的を学生に持たせる。

- (1) 施設の現状について認識を深める。
- (2) 施設の対象児童（者）について理解する。
- (3) 対象児童（者）に対する施設の役割を把握する。
- (4) 保育士の職務と児童（者）へのかかわり方を学ぶ。

このような目的を踏まえ、観察実習、参加実習、指導（部分、一日）実習を実施し、目的を達成できるように努力しなければならない。

## 2. 保育実習Ⅱについて

保育実習Ⅱ（保育所実習）は参加・指導実習であり保育実習Ⅰ（保育所実習）で体験を通して学んだ保育士の職務内容、保育所の機能、子どもの生活への理解とかかわりなどを基本として保育についてさらに深く学ぶことが目的である。保育内容の学び、保育技術の習得など体験を通して保育の本質への理解を深めるために、以下の項目のもとに実習に臨むのである。

実習項目（1）保育士の職務の理解と保育技術の習得

（2）子どもの個人差についての理解と対応方法

（3）指導計画の立案と実践

（4）子どもの家族とのコミュニケーションの方法

（5）地域社会に対する理解と連携の方法

（6）子どもの最善の利益への配慮

（7）保育士としての職業倫理の理解

（8）保育士に求められる資質・能力・技術の理解と自己課題

以上（1）から（8）項目のうち（4）（5）は12日の実習期間では理解することは難しい。（7）（8）に関しては実習後の指導において実習を振り返り、保育の専門家となるべく今後の課題としてさらなる目標へとつながるわけである。

## 2 評価の方法について

### (1) 保育実習Ⅰ

10日間の実習を通しての評価が実習施設から送られてくる。評価項目は養成校側が作成し、基本的に実習指導担当職員により評価が下りる。評価は、次の

A . . . 優れている

B . . . やや良い

C . . . 普通

D . . . 劣っている の4段階になる。実習終了後に間もなく送られてくる

評価表によって、養成校側は実習での学生の様子を測り、学生が実習を通して各項目において何を学び得たかを把握する。この評価によって、養成校での学習過程が実習で効果的に機能できたかを確認し、保育士候補者としての学生の力量がその意欲を更に向上させ、今後の学習課題を示してくれるものとなる。

## (2) 保育実習Ⅱ

保育士としての専門家になるべく現時点の充足度として、下記(1)から(9)項目についてA:よい B:普通 C:努力を要する D:問題が多い の4段階評価である。

評価項目 (1) 実習態度(服装や身なり、言葉遣いは良かったか)

(2) 実習への取り組み(創意工夫をし、意欲的に取り組んでいたか)

(3) 子どもへの理解(一人一人の子どもの言葉や行動に関心を示し、理解を深めようとしたか)

(4) 子どもとのかかわり(子どもの中に積極的に入り、子どもに対し指導・援助をしたか)

(5) 指導者とかかわり(指導の先生の助言・指導をよく聴き、それを守りよく努めたか)

(6) 実習日誌の記録(一生懸命記録し、よりよい記録をするための努力がみられたか)

(7) 指導実習(指導実習への取り組みは、意欲的であったか)

(8) 指導実習(指導計画〈指導案〉の立案・作成は実習生として適切であったか)

(9) 指導実習(呼びかけ〈導入〉や指導方法は適切であったか)

以上の評価項目について実習後に実習生の自己評価をおこない、施設(保育所)側の評価と比較し学生の実習への取り組みについて検討した。

## 3 施設側と学生側の評価結果と考察

### (1) 施設実習

今年度の実習において我々は、実習終了後すぐに自己評価を実施した。実習記憶が新鮮なうちに、実習での活動を自ら評価する事で、実習全般を振り返る良い機会となり得る。実習施設に求める評価内容項目と同様の評価を、自己評価として学生に実施した。そして実習施設から示された評価との比較を試みた。比較は各評価項目ごとに図1～図5で表した。

#### 図1：服務態度

評価A段階のみ自己評価が施設側を%が高い。服務規程の評価内容項目の ①出勤、遅刻、早退等の状況 においては施設側も学生も共に、4段階でA評価をつけている。以下BCDの評価の%値は自己評価より施設側の評価の方が高い。評価内容項目 ②施設の規則、指導者の指示、指導を受ける態度 評価内容項目 ③勤務意欲と言動、礼儀、

服装，責任，報告等の態度において学生の姿勢の未熟さが窺い知れる。Dの評価も頂いてしまったことは，保育士を目指す者にとって，基本的事項の最低の常識が，まだ備わっていない事を表している。

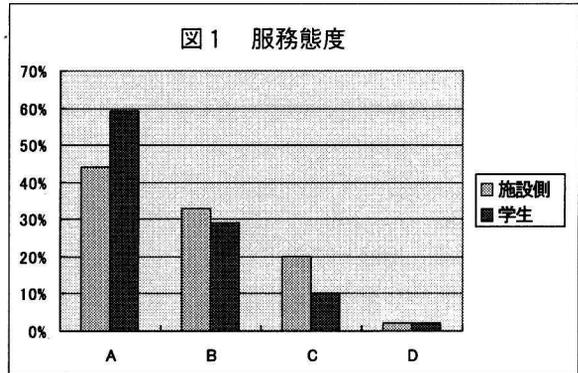
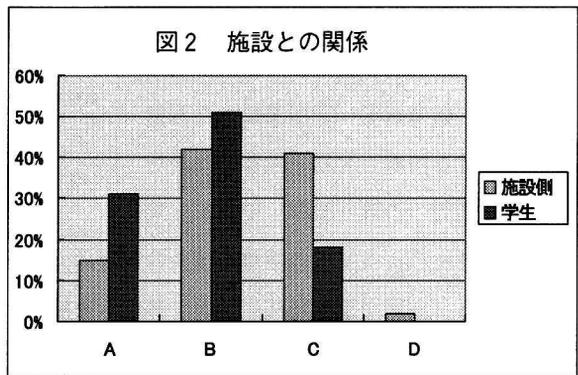


図2：施設との関係

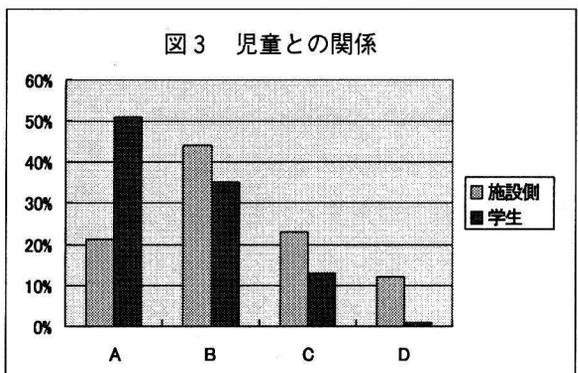
BAの順で自己評価が高く，CDでは施設側の評価が大分高くなっている。BDの評価は自己評価と施設側評価に大きな開きは見えないものの，ACでは，大きな差がある。評価内容項目は ①実習施設の機能と沿革等の理解 ②施設の人的構成，設備，生活環境の理解 ③指導者・職員との協力状況 である。いずれの項目でも自己評価で学生自身がB段階に高い%値を上げている。施設の現状について理解するという実習目的の観点から言えば，自己評価，施設側評価の双方ともB段階に高い%値が見えるのは，やや良いとして学生の姿勢も理解されていると思われる。



成，設備，生活環境の理解 ③指導者・職員との協力状況 である。いずれの項目でも自己評価で学生自身がB段階に高い%値を上げている。施設の現状について理解するという実習目的の観点から言えば，自己評価，施設側評価の双方ともB段階に高い%値が見えるのは，やや良いとして学生の姿勢も理解されていると思われる。

図3：児童との関係

実習に行く前に学生が最も不安に思い，自信を持ってないことが，居住型児童福祉施設での生活と子どもとのかかわり方である。特に学生と年齢が近い児童や，男子生徒への対応の方法に不安を持ったまま実習に入る。しかし，実習を通しての自己評価を見ると，A段階B段階に高い%値が来ている。施設側評価ではB段階が最も高く次にC段階が続く。これは評価内容項目の ①入所児童に対する理解 ②児童との接触状



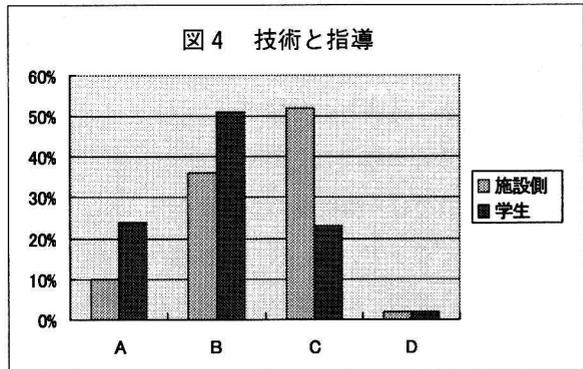
態を見ると，A段階B段階に高い%値が来ている。施設側評価ではB段階が最も高く次にC段階が続く。これは評価内容項目の ①入所児童に対する理解 ②児童との接触状

況 ③児童への愛情、公正さ に対して保育士としての学びを自覚しており、努力しようとしているのが、実習指導担当者にも伝わっていると思われる。それでもD評価が、他の評価項目の中でも最も多いのは、施設実習での児童との関係の持ち方の難しさを示すものであろう。

図4：指導と技術

自己評価ではB段階が最も高い%値であり、施設側評価ではC段階が最も高い%値となっている。

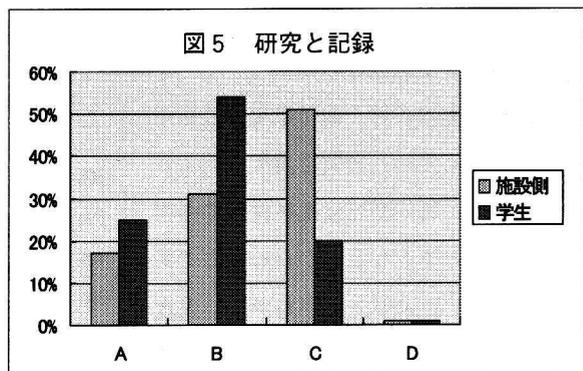
評価内容項目は ①日常生活の指導状況 ②指導に当たる態度と技術 ③幼児保育又は余暇活動への取り組み である。実



習生にとってこの指導と技術の分野は、児童との関係と並び特に努力を要する部分である。施設児童の日常生活面における全般的な処遇を学ぶ事になる。生活場面に実習生が入り込んでいくわけだから、保育士の援助を通して、個別性に配慮した養護のあり方を学び習得する。実際には、学生は躊躇し積極性をだせず戸惑う部分が多いようである。施設側評価はCが最も高い%値になっている。

図5：研究と記録

自己評価ではB段階の%値が高く、AC段階はほぼ並んでいる。施設側の評価はC段階が高く続いてB段階となる。評価内容項目は ①研究への取り組みや工夫 ②観察の努力と成果 ③記録への熱意と内容である。



日々の実習の中で毎日、目標を立て、実習の流れを克明に記録する事が、実習の学びをより確実なものとする。指導案の作成の仕方、日誌の書き方等は実習に入る前の大切な指導事項である。記録の方法、整理の仕方など、模擬的に実際に書かせたりするが、例年、この項目は、学生にとって不得手の分野となっている。居住型児童福祉施設等の生活に参加し、子どもへの理解を

深めるとともに、居住型児童福祉施設等の機能とそこでの保育士の職務について学ばせる。

施設側からは、毎年養成校での指導の充実を求められているのが現状である。

## (2) 保育所実習

図1. 実習態度では、施設側と学生側にあまり差はみられなかった。A評価においては施設側の方が学生側を上回っていた。「実習をさせていただく」という謙虚な姿勢で臨んでいた結果であると考え。C評価については、「言葉使いなどから実習に対しての心構えが甘い」との指摘があったことは2年生として残念であった。

図2. 実習への取り組みでは、A評価が学生側50%に対して施設側では32%である。実習の意義・目的を再確認し、自らの課題をもって実習に臨んでいるかを問われることであると考え。また、保育実習Ⅱは保育実習Ⅰよりさらに充実した内容であることを施設側が要求している結果かと考える。

図3. 子どもの理解に関してもA評価が学生側では66%であるのに対し、施設側では36%である。保育実習Ⅰ（保育所基本実習）では、乳幼児の発達を遊びや生活の中から理解することであったが、保育実習Ⅱではさらに個人差についての理解、特別な配慮を要する子どもへの理解を深め、その対応・援助の方法について学ぶことであり、施設側としては多様なニーズへの対応方法の習得を期待している結果であろうと考える。

図4. 子どもとのかかわりについてもA評価が学生側61%に対して施設側では27%と差がある。積極的にとのコメントをいただく実習生がいるが、ややもすると子どもと関わってはいないが、子どもの要求のままに動いているということはないだろうか。子どもの発達過程や個性を理解した上での言葉掛け、援助が求められているのでであろうと考える。また、表情豊かに接するようにとのコメントもあり、性格的なものかあるいは実習という緊張の中で、本来の自分を発揮できないでいたのか問われるところである。

図5. 指導者とのかかわりについては、A評価が学生側64%、施設側55%と大幅な差はなかった。指導者の助言に対し素直に受け止め、実践していたと考えてもよいのではないだろうか。残念なことに施設側でのC評価が14%であった。コメントのなかに“助言が改善されない”との指摘があり、このことは日頃の学校生活においても共通する。助言に対して受け止め、改善しようとする努力ができるような指導をしていく必要があり、まさに生活指導であり実習に送り出すためにはここまでの指導をせざるを得ないのである。

図6. 実習日誌の記録はA評価が施設側で36%、学生側で48%、C評価が施設側で16%、学生側11%であり、このことは日誌の記録が充分でないことを表していると言え

る。授業の中で文章作成など取り入れながら日誌の書き方を学ばせている。さらに目標を設定し具体的に記録することを、日誌例を写させる作業を通して学ばせているが、このような結果をみることは残念である。A評価のコメントに「気づき、発見、感動、反省、考察など具体的に記録されよい」「たくさんの発見や気づきの中から自分だったらどう対応するのか考える姿勢が好ましい」などをみると、C評価に関しては、目標設定とそれに対する気づき、反省などの記録がなく、毎日の日課のみの羅列になってしまうのかと考える。

図7. 指導実習への取り組みが意欲的であったが、C評価は施設側では9%、学生側は7.5%である。意欲的と評価されない実習生が1割弱であり項目2から項目6と比較するとよい結果である。1割の実習生の取り組み方は、子どもの理解に繋がることと考える。

図8. 指導計画（指導案）の立案・作成に関しては、C評価が施設側20%、学生側20%である。A評価では、施設側が39%に対して学生側は22.5%という結果である。この数字から指導案作成に対して苦手意識を持っていると同時に、実習生が立案に対して自信を持ってないということであろう。また発達過程の理解と子どもへのかかわり方が充分でない結果であると考えられる。

図9. 指導方法は適切であるかに関しては、施設側ではA評価11%、学生側20%と施設側の評価は全項目中一番低い。C評価においても施設側23%、学生側20%と高い数値である。指導実習における呼びかけ・導入は実習生にとっては難しいことであり、5領域を深めることであると考えられる。

図1

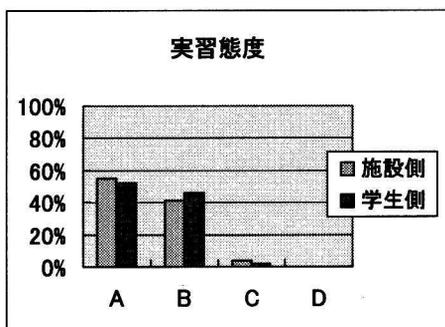


図2

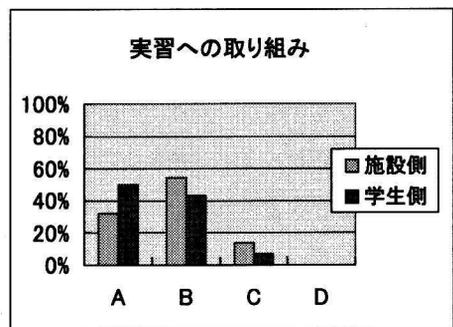


図 3

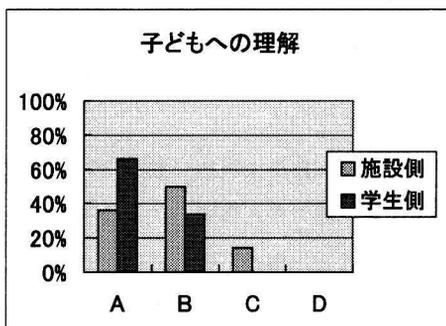


図 4

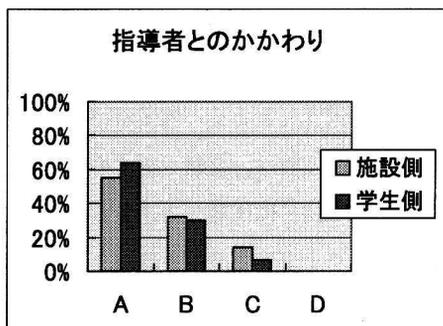


図 5

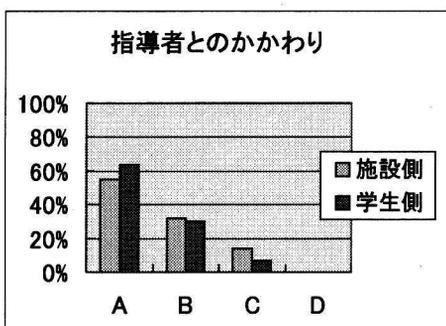


図 6

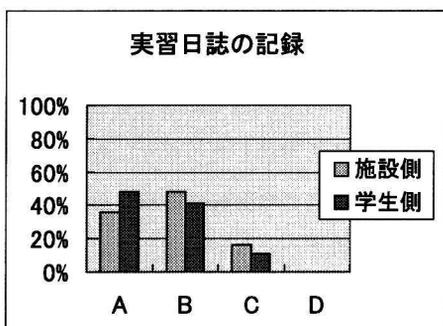


図 7

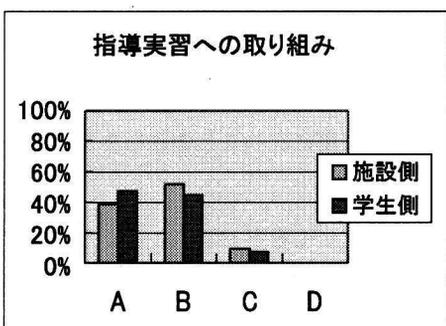


図 8

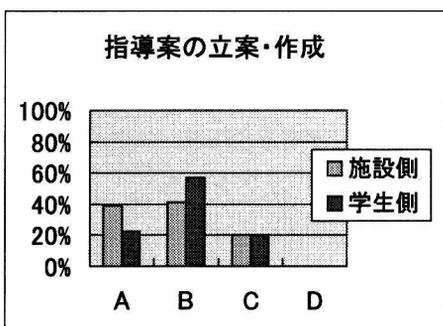
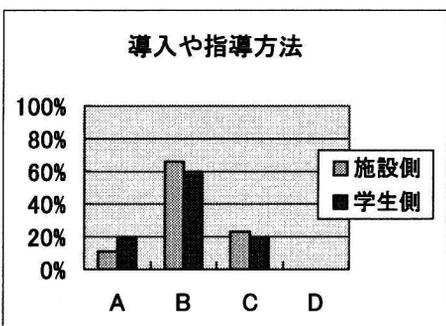


図 9



以上、保育実習Ⅱ終了後の施設側と学生の評価である。評価は項目により大きな差があるものとあまり差がないものがあることがわかる。

#### 4 保育実習ⅠⅡ 実習終了後の学生の意識変化について

実習に入る前は、自信も無く心細さばかり先にたって身体さえ自由に動けないような状態だった学生が、10日間現場で生活を共にしながらの学びを体験できた事で、大きな達成感を味わっている。まず、実習の成果や収穫よりもその日程をやり通せた事が、彼らにはどれ程か重要なのである。それは自己評価の、服務規程・実習態度の%値が、全ての項目の中で最も高い点からも分かる。子どもが大好きで保育士になりたいという強い願望を抱いているものの、あまり学力に自信が無く、自尊感情を持たず、試みようとする事が発揮できないようである。しかし、現場の指導員の配慮や丁寧な指導を受ける事で、徐々に何をなすべきかが分かってくるようである。慣れて来て、その生活圏での子どもとの関係が生じてくると今度は充実感を覚えるようである。安易に実習現場を理解したつもりになってしまった学生の自己評価が、施設側評価とのズレとなっている。施設側と学生側の差が大きかった項目は(2)実習への取り組み(3)子どもの理解(4)子どもとのかかわりである。このことは子どもへのかかわり方や援助の方法など、技術のみで保育が成り立つわけではなく、人間性・自己への洞察力をはぐくんでいくものであることを語っているものと考えられる。また指導実習に関しては学生側の評価が大変低いパーセンテージである。実習前に指導実習に対しての不安で、質問など多いことは確かである。“実習前に学んだことで役に立ったこと”“実習前に学んでおきたかったこと”のアンケートを取った結果、指導案作成や指導技術に関してははどちらも多かった。指導実習は子ども一人一人への理解とその場に応じた対応(指導技術)が要求される。今回の実習を通して指導的立場に立つことの難しさと保育士としての責任を感じ取ったことと思う。

また、保育実習指導という教科で現場での実習を想定して教室で学ぶことより実祭に実習現場で習得する事の多さに我々教員は実習の成果が大きい事を知る。今後は実習施設からの評価やコメントに実習中の学生の様子を測り、現場実習と授業教科のバランスをとりながら指導していきたいと思う。

#### 参考文献

- 1) 全国保育士養成協議会：保育実習指導のミニマムスタンダード
- 2) 森上史郎・大豆生田啓友：幼稚園実習 保育所・施設実習